

大連外国語学院における日本語の聴力教育について

李 培建*

目次

- 1、はじめに
- 2、外国語教育に関する認識変遷
- 3、素質や能力や需要に応じる教育
- 4、特色のある聴力教育
- 5、おわりに

1、はじめに

中国の外国語の教育において、地域の特殊性に応じて、その言葉に重きを置く。例えば、六十年代の初めにハルピンにロシア語専門学校（現在の黒竜江大学に帰属）を、大連に日本語専門学校（現在の大連外国語学院に改称）を、上海に英語専門学校（現在の上海外国語大学に改称）を設けたように、歴史が原因で、中国の東北地方では、ロシア語や日本語などを中心教育としてやっておる。これに対して、中国の広東、上海、江蘇、浙江、北京、天津地域では、英語やフランス語やポルトガル語などを中心教育としてやっておる¹⁾。そして言葉により、それぞれ個々の特徴をもつ教育を施していると言える。ここに大連外国語学院の日本語教育をもとに、聴力教育について触れてみたいと思う。

2、外国語教育に関する認識変遷

外国語教育とは何かということについて言えば、六十年前は現在に比べて今日ほどはっきりした認識をもっていなかった。その認識変遷を見て、(填鴨式教学法) cramming method of teaching、(模块化教学法) Modular Approach、(功能教学法) Functional Approach という道を辿ってきた。これらの教育方法をどう見ればよいかということについて、批判もあれば、称賛もある。要するに教育者により、認識は様々である。

(1) 填鴨式教学法 (cramming method of teaching)

中国の近代史を遡って見れば、わかるように中国共産党が政権を取る前後、アメリカをはじめ、西ヨーロッパにより封鎖された中国共産党の政府は旧ソ連政府から各分野における多くの援助を受けることになっていた。それに同じイデオロギにより結ばれたので、中華人民共和国が成立してから、イデオロギによる中ソ間の政治の食い違いをめぐって論争が行われるまで、中国は何もかも旧ソ連に学ぶことになったというわけである。そればかりでなく政治から工業、農業、経済、文科教育などの各分野における交流を始めるには、

*中国：大連外国語学院副教授 本学社会システム研究所客員研究員

すべて旧ソ連から援助、協力を受ける立場に立たされていた。またこれらの交流を始め、人員交流を行うには、言葉がなければならぬので、旧ソ連の教育システムをそのまま取り入れてきた。旧ソ連の教育システムと言え、現在も年配の教育者の教育方法にその影を伺える。その中で一番影響力をもつのは（填鴨式教学法）cramming method of teaching だったと言えるだろう。

（填鴨式教学法）cramming method of teaching は教育を受ける相手の都合をほとんど考えずに一方的に被教育者の頭の中に知識を叩き込み、無理やりに覚えさせたのである。いわゆる詰め込み教育を施してきた²⁾。当時中国には系統的な教育システムができていなかったの、この詰め込み教育（cramming method of teaching）は長い間中国の教育界に重要な影響力を持っていた。今日この詰め込み教育（cramming method of teaching）を振り替えて見れば、マイナス面が大きいことをつくづく感じさせられている。というのは、教育界には「聞けば忘れ、見れば印象が残り、やれば覚える」という言い方があるが、この詰め込み教育（cramming method of teaching）を推し進めれば、「聞けば忘れ、見れば印象が残り」しかできなく、あとの「やれば覚える」まではなかなか辿っていない。特に学生の学習方法を見てわかるが、その試験に良い成績が取れるように公式なものをひたすら丸暗記し、あとで忘れてしまう。なぜなら、これは教育者としては被教育者の立場に立って、相手の能力、需要などを考えずに無理に頭の中に叩き込むことに対して、被教育者自身としては覚えようとしなく、堅苦しいものを覚えさせられるのに抵抗が出てくるのが当然であろう。

というのが原因で、教育者の中で失敗した例をもとに、良い教育方法を作り始めた。

その後、外国の教育方法を研究し、中国の実情に相応しい（啓蒙教学法）heuristics; the heuristic method of teaching、（情景教学法）Scene teaching method、（听说教学法）hear teaching method、（直观教学法）keep view teaching method、（模块化教学法）Modular Approach、（功能教学法）Functional Approach に触れてたので、中国の実情に相応しい教育方法などが生まれたのである。これらの教育方法を生かして、中国各大学なりに特色のある教育を進めてきた。勿論大連外国語学院では日本語教育において詰め込み教育（cramming method of teaching）の不備なところを避けて、特色の教育方法を行っておる。

（2）模块化教学法（Modular Approach）

学校や教育者により、教育方法は多種多様であるが、その中で、（模块化教学）Modular Approach を取り上げられる。要するに社会の需要に応じて人材を養成する教育方法の一つである。

七十年代の末から改革開放政策を施されて以来、中国は世界各国、とりわけ隣国の日本との間で科学文化、経済貿易各分野にわたる交流が一段と頻繁になりつつあった。市場の需要があれば、日本語教育の発展があるということで、中国全土において、「日本語ブーム」が沸き起こった。特に、八十年代中期以後、中日両国の貿易量が大幅に増長し、中国大陸に進出する日本企業の数が増え、中国の各地に日本企業の現地駐在事務所、中日合併企業、日本独自の資本企業が現れた。日本語が分かる人材の不足が更に深刻になりつつあり、学生の就職先と仕事の内容も大きく変化した。八十年代初期までの就職先は主として旅行、国際貿易、政府対外事務、教育機関であり、仕事の内容は殆ど通訳と教育機関の教師であった。八十年代以後の日本語人材の

需要は、就職先から見れば中国の経済、貿易、金融、産業の諸分野が加わると、中日合併企業、日本独資企業の求人がいっそう緊迫した状態であり、仕事の内容から見れば、もう単純に通訳をするのではなくて、日本に対してより幅広い知識とより深い理解を持ち、国際関係、国際貿易、国際金融、企業経営などの基礎知識を持ち、独自の事務処理ができる人材が求められるようになってきた³⁾。というのが原因で、日本語人材の知識構造はすでに強い語学力だけでは社会の需要に間に合わなくなった。こうした状況の中では、大学の日本語専門教育は大いに強調された。要するに需要に応じて人材を養成するのが急務だった。その時期から企業や研究機関や金融機関、それに中日合併企業、日本独資企業などが直接に学校に卒業生を求めることになっていった。この動きに応じるように教育方法を変え、(模塊化教学) Modular Approach を提出した。学校教育の内容も社会の需要に応じてさらなる充実が求められ、学生の知識構造を改善するために工夫を凝らしてきた。

(3) 機能教学 (Functional Approach)

一九七一年に国連における中国の代表権が回復され、一九七二年に中日両国間に外交関係が樹立され、それ以来中日両国間の各分野にわたる直接交流が日増しに頻繁に行われてきたので、言語による交際技能、とりわけ口頭表現力(会話能力)が重視されるようになった。この時期から「聞く、話す、読む、書く、訳す」という言語交際の技能を全面的に身につけることが外国語人材の必要条件として強調され、そして「聞く、話す」の教授法が広く採用されていった。

七十年代から八十年代までの日本語教育は語学教育の角度から見れば、五十年代から六十年代までの日本語教育に比べて明らかに

大きく進歩を遂げたものであり、外国語教育の一般的なルールに適合し、学生の語学能力のバランスが取れ、国際交流への適応性が改善されたものである。しかし、これらの時期の日本語教育は、やはり不十分なところがあり、ただ語学教育に限っているので、教育課程による知識面が狭くなり、日本に対する深い理解、交流または研究のための人材養成を目指す教育システムがまだまだできていなかった。七十年代からの日本語教育を振り返って見れば、この日本語専門教育は大いに不足していた通訳人材または日本語教師の養成が急務となったのである⁴⁾。

「聞く、話す」はポイントになっているので、教育カリキュラムが大きく調整され、ヒヤリングや会話の授業がかなりの時間数を占め、精読授業のなかにも会話の内容が大量に盛り込まれた。というわけで、学生の聞く、話す能力が伸びつつ、社会の需要に対する適応性が高められた。

3、素質や能力や需要に応じる教育

「聞く、話す、読む、書く、訳す」という言語交際の技能は常に採用されている。この中では順番から見れば、「聞く」が一番挙げられる。というのは、「聞く」は外国語の学習者にとって、先に身に付けなければならない。基本訓練のポイントの一つである。聞いて分かれば、「話す、読む、書く、訳す」を身に付けることができる。聞くは先決の手段である。

(1) 言語の実力と口語表現能力

相手の話を正しく聞こうと思えば、しっかりした言語の実力を持たなければならない。言語の実力には原語 (source language) と訳語 (recptor language) が含まれている⁵⁾。こ

れらを身につけるのが必要である。ある言語を身につけると言えば、その言語に関する文法と語彙は勿論、言語の文化背景ばかりでなく、言葉の上品さ、俗語の言い方、ユーモアさ、大袈裟、曖昧さなどの特徴を覚えることは重要である。

相手の話を正しく聞くことは、言語の実力の表れでもある。この言語の実力は日本語の学習者にとって、きわめて重要だと言える。いつも相手の話を正しく聞くには、聞き手としては、上手に言い回しを表現し、諺などを使いこなし、常に言語に関する知識を蓄えることが必要である。

(2) 心理素質

聞き手としては、相手の話を正しく聞きとれるかどうか、心理素質がポイントの一つでもある。心理素質には感覚、知覚、注意力、思考、意志などが含まれている。その中で意志がポイントだと思う。というのは、意志により、いざという場合、慌てることなく、しっかりと戦うことができる。誰もが頭脳の興奮中心の存在を前提として、特に難しい時に情緒を抑制し、心理活動を調整することができる。その意志のお陰で、スムーズに聞ける調子になるであろう。

(3) 反応能力

聞き手としては、相手のいう話の思想や感情反応を把握することが肝要だと思う。しっかりした言語能力を持ってはじめて、相手の言う原語 (source language) に出る思想、精神、情緒、度合、語感などを意識することができる。聞き手として原語 (source language) を少し聞いただけで、相手の言う原語 (source language) に出る思想、精神、情緒、度合、語感などを感じ取れ、そして反応することになる。これはあたかも画家があ

る美術作品を、音楽家がある音楽作品を鑑賞する如く、素早くその作品に主題の思想、良し悪し等が気付かれ、相手に自分の感想などを伝えられる。

(4) 個人の実力

現在、人間が集まる限り、多くの話題を持ち上げられる。例えば人々の関心を寄せる社会問題から戦争、平和、発展、貿易、経済、科学技術、人権、人口、環境、気候、特許権などまでの人間の存在にかかわる問題がある。従って聞き手としては正しく聞きとろうと思えば、これらの問題に関する知識を持たなければならない。聞き手は正しく聞くには、一生懸命に専攻に力を入れ、豊かな知識が持てるように、目的を持って多く聞く。相手がちょっと言い出したら、どんな意図を持ってそれを言っているか、またこれから何を言うか、把握できるように聞く訓練を繰り返さなければならない。そして聞く技を身につけることが重要である。

4、特色のある聴力教育

どのように聴力教育を施しているか、前に述べたことがあったが、(啓発教学法) heuristics; the heuristic method of teaching、(情景教学法) Scene teaching method、(听说教学法) hear teaching method、(直观教学法) keep view teaching method、(模块化教学法) Modular Approach、(功能教学法) Functional Approachなどを挙げられる。ほかに学校や学者によってまたいろいろな教育方法を研究されている。実は大連外国語学院では、長いこと聴力教育をやってみた結果、一番多く(功能教学法) Functional Approachを使用されるのが実情である。

(1) 文型の聴力教育

教学中、学年に応じて、それぞれ特色のある聴力教育を行ってきた。1年生の場合、言葉の認識がまだ弱いので、決まり切った言い回しをもとに、仕組み言葉を繰り返して教えてやった。その話を文型に分けて教えてやるのが特徴の一つである。その文型には判断、自己紹介、存在、時間、道具、疑問、反問、勧誘、並列、肯定、否定、意志、伝聞、比喩、目的、原因理由、逆接、順接などがあげられる⁶⁾。これらの文型に基づいて、文を作ることにより、聴力教育をやっておる。例えば、判断を例にしてみると、

「～は～だ」の形の中の波線に名詞を置き換え、判断の文を作ることになる。

- ① Aさんは教師だ。
- ② Bさんは会社員だ。
- ③これは日本語の新聞だ。
- ④それは子供向けのアニメーションだ。

文の仕組みに変わりなく、ただ名詞を置き換えて、判断の文を多く作ることができる。

また、存在を例にしてみると、

「～に～がある/いる」の形の中の波線に名詞を置き換え、存在の文を作ることになる。

- ⑤二階に事務室がある。
- ⑥事務室に事務員の田中さんがいる。
- ⑦庭に池がある。
- ⑧池に魚がいる。

文の仕組みに変わりなく、ただ名詞を置き換えて、存在の文を多く作ることができる。

また勧誘を例にしてみると、

- ⑨もうすぐ時間だから、起きよう。
- ⑩暗くなっているから、帰ろう。
- ⑪せっかく来ているから、もうすこしゆっくりしようよ。

⑫これ、なかなか美味しいよ。食べないか。
文の仕組みに変わりなく、ただ動詞を置き

換えて、勧誘の文を多く作ることができる。

また並列を例にしてみると、

⑬あのメロンは味といい、香りといい、最高だ。

⑭画家の山口さんは、自宅の壁といわず、床といわず、ありとあらゆるところに絵を書きながっていた。

⑮生徒は見たり聞いたりしたことを作文に書いた。

文の仕組みに変わりなく、ただ語彙を置き換えて、並列の文を多く作ることができる。

というように、ごく基本的な文型を用いて、一年生の学生に繰り返して同じ形の話聞かせてやる。初めに学生には語彙数が少ないので、抵抗が出てくるが、語彙を多く覚えるに従って、熟練し、聞きやすくなる。実は聴力教育において、この文型の聴力教育がとて役立っているもので、広く採用されている。

(2) 場面設定の聴力教育

二年生になれば、学生が学力が伸びるので、まだ一年生の文型の聴力教育に止まらずに教育方法を転換しなければならない。その中で、場面設定の聴力教育を取るのの一つである。というのは、場面設定により、形式上の経験を覚えさせ、その場面設定の内容を生かして、その時に役立てると考えたからである。場面設定の内容には買い物、道尋ね、道案内、訪問、乗車、感謝、お詫び及び社会問題などがあげられる。これらの内容に合わせて、場面設定をして、聴力教育を行うわけである。例えば、⑯⑰を例にしてみると、

⑯最近パンを食べる人がふえて、コメの消費量はむかしより少なくなった。コメを売る人たちはいろいろ苦勞している。

東京のあるコメ屋さん、コメの売りあげがへったので、二年まえに精米機をはずし

て、店の中に料理をする場所をつくり、おにぎりや弁当を作るって売りはじめた。いまでは、昼休みに近所の会社や学校の人たちが大勢買いにきて、店は満員になるそうだ。

また、最近では「ブレンド精米」をする店もある。お客がえらんだコメを目のまえでブレンドし、精米する。まるでコーヒーのようだ。コメも精米したあとすぐ食べるほうがおいしいので、この方法は人気が出て、コメの売り上げが大変ふえたそうだ。

ごはんを無菌パックにしたものも出ている。電子レンジなどであたためれば、おいしいごはんを食べることができる。

こうした努力で、コメの消費量はまた少しずつふえているようだが、家庭でごはんをたくことはすくなくなっている。朝はパン、ひるは外食、夜もときどき外食という人がふえているので、将来はかまのない家庭もめずらしくなくなるかもしれない。

⑰デパートやスーパーで買い物をする。買った品物を、お店の人が紙で包む。そしてビニールの袋に入れる。何枚も何枚も紙やビニールを使うときもある。わたしたちはそれがあたりまえだと思っている。でも、このたくさんの紙や袋は本当に必要だろうか。うちへ帰って品物を出したら、ごみばこの中が紙やビニールでいっぱいになる。

最近、みんなでゴミを少なくしようという意見がつよくなってきた。この包装紙やビニール袋もたくさんのゴミになっているようだ。それで、デパートでも、この過剰包装はだんだん少なくなって、かんだんになった。大きいスーパーでも、いろいろなくふうがはじめた。あるスーパーでは、買い物をするときに自分で袋を持っていったら、カードにスタンプを押してくれる。そしてスタンプがあつまったら、買い物券をくれる。別のスー

パーでは、再生紙の袋を使うようになった。また、布で作った買い物袋も売られるようになった。

わたしたちがスーパーなどで、毎日一回「袋はいりません」といったら、一年間で数億枚の袋がのこるそうだ。一番かんだんな環境保護ではないだろうか。

というように、われわれが生活の中でどうしても直面しなければならない問題を場面設定の内容にして、繰り返して聞かせる練習をすることにより、われわれの生活に近い内容なので、記憶しやすく、聞く実力を高められるとともに知識を拡大される。

(3) 試験向けの聴力教育

七十年に比べて、学生の就職先と仕事の内容も大きく変化した。八十年代以後の日本語人材の需要は、就職先から見れば中国の経済、貿易、金融、産業の諸分野が加わると、中日合併企業、日本独資企業の求人が殆どである。仕事の内容から見れば、もう単純に通訳をするのではなくて、経済、貿易、金融、企業経営、人員交流などにおいて、独自の事務処理ができる人材が求められるようになってきた⁷⁾。というのが原因で、日本語人材の知識構造はすでに強い語学力だけでは社会の需要に間に合わなくなった。しかし中国も日本と同じように、八十年代から学歴社会に入り、各役所、各企業、それに民营企业(自営業)は人員を募集する場合、まず、応募者に大学卒業証明書またはこれに相当する証明書を提出してもらうことになっている。その卒業証明書一つあれば、希望するポストにちかづける夢を持ると言われている。しかし、各役所、各企業では、その卒業生を扱ってみて、思う通りに行かないことを痛感させられた。要するに、卒業証明書を持っている者は必ずしも希望する者ではないと分

かったわけである。この事情を反省して、日本の企業、会社、事務所は人員を募集する場合、日本国際交流基金の実施した日本語能力試験合格の一級資格証と二級資格証を提出させることになっている⁸⁾。要するに近年、日本語能力試験の受験者は、大学で日本語を学ぶ学生に加えて、仕事で日本語を必要とする社会人、日本で生活するために日本語を必要とする人である。受験の目的も実力の測定に加え、就職、昇給、昇格のためと、変化が見られるようになった。

日本国際交流基金の実施した日本語能力試験と言え、年に2回(2010年から実施)であり、聴解、読解、文法、語彙と四つの内容を受ける。その中の一つに失敗すれば、合格できなくなるので、非常に厳しいものである。従って、学生の要望に沿って、聴力教育を行うことが重要なポイントの一つでもある。

聴解とは、聞き手が話し手の発話を聞き、課題や目的に応じて、言語知識や話題に関する知識とそれらを利用する能力を合わせて使用しながら、情報を処理し、理解していく過程だ。従って聴解の狙いに合わせて、即時に聞き取れるように、日本語能力試験に間に合うように、ほぼ一カ月の受験の指導をやることになっている。宿題として毎年の問題集や問題対策を学生に学習させ、その都度、学生からの質問に答え、ポイントの説明をやっている。そして聴解の難点について、

- ・音の変化がおこる
- ・音の強調やイントネーションが重要な意味をもつ
- ・繰り返しや言いよどみが生じる
- ・単語や句の形で話されたり、倒置が起こったりする
- ・話者間で共有されている情報は省略され、言語化されないことがある

- ・習慣性の言い方がおこる
- ・諺の応用に意味をもつ

というように、日本語能力試験のために聴力教育の特徴に応じていろいろと考えてやっている。勿論日本語能力試験ばかりでなく、日本国貿易振興会が主催する年に4回の「ビジネス日本語能力試験/BJT」、日本国検定協会が主催する年に6回の「実用日本語検定試験/J-TEST」、中国教育部が主催する年に1回の「全国外国語レベル検定試験/WSK」、「通訳資格証明書試験」「大学日本語四級、八級検定試験」などは現代人の夢を実現させるために大きな舞台を作っている。これらの試験を踏まえて、聴解試験を行っている。

(4) 就職向けの聴力教育

七十年代の末から改革開放政策を施されて以来、中国は世界各国、とりわけ隣国の日本との間で科学文化、経済貿易各分野にわたる交流が一段と頻繁になりつつある。国内では政府の指導経済から市場経済に転換されつつある。そして、社会的に個人の意志や希望などを尊重されるようになってきた⁹⁾。人々は自分の考えを持って就職や進学や留学などを選ぶことができ、好きな人生を楽しむことができることにしている。大連は中国の開放の町の一つでもある。特に、八十年代中期以後、中日両国の貿易量が大幅に増長し、大連に進出する日本企業の数が急増し、日本企業の現地駐在事務所、中日合併企業、日本独自の資本企業が現在四千社近く現れた。このような時代の流れに左右されて、学生の就職先と仕事の内容も大きく変化した。就職先から見れば中国の経済、貿易、金融、産業の諸分野が加わると、求人がいっそう緊迫した状態である。例えば大連ではすでにBPO産業の一つとして大きな進歩を遂げているので、注目させている。従って大連外国語学院の日本

語学部を卒業した学生の就職先から見れば、BPO 産業 (Business Process Outsourcing) の HP、Genpact、Dell、IBM に三割就職している。日本企業の現地駐在事務所、中日合併企業、日本独自の資本企業に三割ほど就職している。あとの四割は進学か留学である¹⁰⁾。日本語人材の知識構造はすでに強い語学力だけでは社会の需要に間に合わなくなった。こうした状況の中では、大学の日本語専門教育は大いに強調された。学校教育の内容も社会の需要に応じてさらなる充実が求められ、学生の知識構造を改善するために工夫を凝らしてきた。

例えば、三年生に対してリスニングの訓練を行う。即時応答できるように、スピードアップの練習をさせる。例えば、NHK のニュース、演説、特集、ゼミなどを正確に聞かせるために、繰り返して聞く練習をさせる。また「課題理解」「概要理解」「ポイント理解」「総理解」を旨として、聞く練習を展開していく。

また、シャドーイングの訓練も重要である。アナウンサの言うことを聞かせ、真似させるをやっている。アナウンサの言うスピードについていけるかということも大事だと思う。

この訓練の中に出迎え、見送り、宴会の挨拶 (歓迎会、送別会)、スピーチ、商品の説明、会社案内、価格の見積もり、電話の打ち合わせ、金銭の返済などを取り入れる。

目的を達成させるための養成目標としては日本語の実用の能力を持ち、対外的業務の水準に対応できる日本語人材を養成する。あくまでも学生の応用レベルを高めようとしている。要するに、社会の需要に合わせて学生を養成するのが旨である。

5、おわりに

如何に聴解教育をして良いか常に日本語教師の間の中で意見を交換されている。その中で政治環境、教育理念、教育設備、教育方法、教師養成等を挙げられているが、日本語教育の教師の一人としてはどれも重要だと思う。しかし、不備なところと言えば、以前は録音機のような機械がなくても、教師を中心に一対一で聞く練習をやってきたが、現在は学生が多すぎる (日本語の在籍は 7000 名以上) のので、教師と学生はコミュニケーションがほとんどない。そればかりでなく、マイペースで聴解教育を進めている教師が少なくない。日本語の教育の中で常にその聴解教育を考えさせられている。これは教師にも学生にも直面しなければならない問題である。というのは、聴力の実力を高めれば、評価される。それと同時に、学生の出世のチャンスも多くなる。要するに、それぞれ学生の将来の利益と繋がっていると言えるからである。

【注】

- 1) 武連平 2008 年の「全国大学評価報告書」
- 2) 「中国外语教育史」上海外语教育出版社 1998 年 5 月
- 3) 李培建「中国における日本語教育と日本語教材の編成及び使用について」中央学院大学社会システム研究所『紀要』第八巻第一号 (2007)、p210
- 4) 李培建「中国における日本語教育と日本語教材の編成及び使用について」中央学院大学社会システム研究所『紀要』第八巻第一号 (2007)、p210
- 5) 宋協毅「同声传译」(2005)、p12
- 6) 「日本語表現文型 500」アルク (2005)、p8
- 7) 李培建「中国における成人の強化外国語教育について」中央学院大学社会システム研究所『紀要』第九巻第一号 (2008)、p226

- 8) 李培建「中国における成人の強化外国語教育について」中央学院大学社会システム研究所『紀要』第九卷第一号(2008)、p226
上海外语教育出版社 2000年5月
- 9) 人民日報「改革開放30年」2008年11月28日第一版
上海外语教育出版社 1998年5月
- 10) 「大連外国語学院日語学院简介」内部資料 2009年
上海外国語教育出版社編 2002年2月
- 5) 「中国外语教育史」
高等教育出版社編 2003年3月
- 6) 「高校日本語専攻八級試験大綱」
内部資料 1996年
- 7) 「全国外国語水準(wsk)大綱」
内部資料 2008年
- 8) 「大連外国語学院教学大綱」
内部資料 2008年
- 9) 「大連外国語学院简介」
内部資料 2008年
- 10) 「大連外国語学院日語学院简介」
内部資料 2008年
- 11) 「大連外国語学院海外考試中心简介」
2007年12月
- 12) 「文化大革命四十周年」
STNN, CC 2006年5月

参考文献

- 1) 「大学日本語教学大綱」
高等教育出版社編 2000年10月
- 2) 「短期外语強化教育論集」
北京語言學院出版社 1998年6月
- 3) 「高等院校日本語専攻高年級教学大綱」
教育部高等学校外国語専攻教学指導委員会日本語組編 2003年3月
- 4) 「外语強化教学論文選」

The Listening Training Course in Japanese Language in Dalian University of Foreign Language

LI Peijian

Dalian University of Foreign Language

Abstract

The listening training course serves as a very important link in foreign language education, a very essential sector in the entire educational activity. Since the domestic and overseas educational concepts at different periods exerted different influences, many educational models were adopted along the educational activities. During the process of the changes in the educational activities, the cognition of these practice were constantly perfected. The views on listening training course differ accordingly as people differ from each other. The following is a discussion focusing on the listening training course in Japanese language in Dalian University of Foreign Languages.